Interview with Seiji Ozawa

小澤征爾

僕はボストン響でオーケストラと一緒に育ったと思っているんだけど、ベルリン・フィルやウィーン・フィルのお陰でたくさん勉強させてもらった。

取材・文＝中 東生
Text=Shinobu Naka

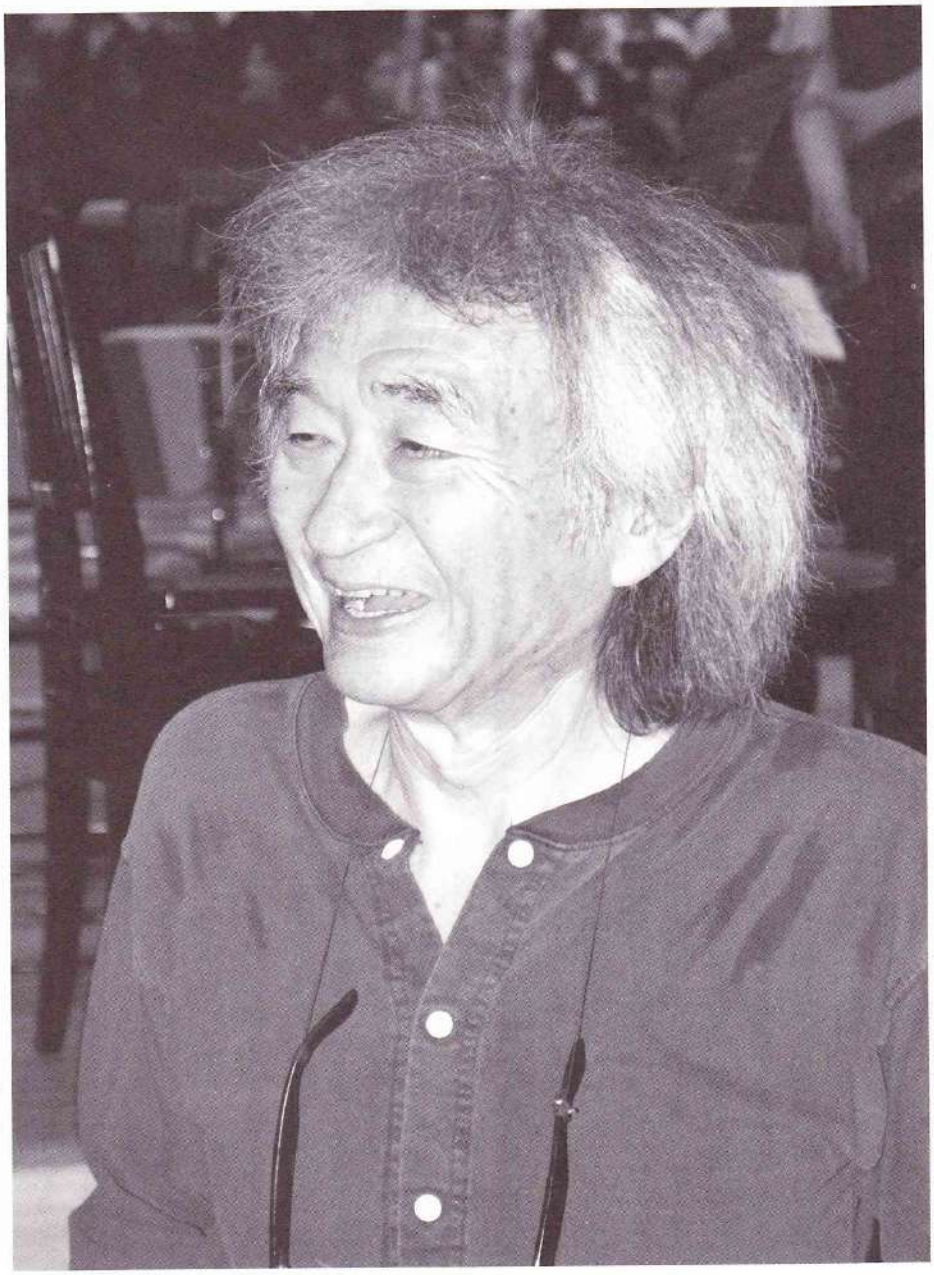
現在では、ウィーン国立歌劇場、新日本フィルにポストをもち、サイトウ・キネン・オーケストラを中心に、サイトウ・キネン・フェスティバル松本、小澤征爾音楽塾を主宰する小澤征爾。トロント響、サンフランシスコ響、ボストン響、そしてウィーン国立歌劇場と、世界の名だたるオーケストラ、歌劇場のシェフを務めてきた氏に、ここではウィーン・フィル、ベルリン・フィルを中心に、世界の名門オーケストラについて話を聞いた。

ボストン響はアメリカとヨーロッパのオーケストラの両方の長所をバランスよく持っている

世界の音楽界に日本が仲間入りできたのは、マエストロ・オザワの存在が貢献していると言えよう。海外生活50年を経て、過去、現在、未来について語ってもらった。

――先日久しぶりにボストン響定期に登場しましたが、ウィーンに移ってから今までの間にボストン響は変化していましたか。

小澤（以下、O） まずはすごく嬉しかったです。みんなとても調子よくて、特にピーター・ゼルキンとオンド・マルトノの原田さんが弾いたメシアンの《神の顕現の3つの小典礼》がよかった。タングルウッド・フェスティヴァルの女性コーラスも素晴らしかったし、オーケストラも良かった。もちろんこの曲は、僕も昔何回もやりましたよ。メシアン夫人がピアノを弾いて、ボストンでもフランスでも演奏しましたが、今度のは〝超〟良かった。それで、ボストンっていうのはやっぱり、そういう力があるなぁって思った。ベルリオーズ《幻想交響曲》も指揮したんだけれど、昔の色が落ちてないです。それにあそこは、ホールの音響がいいですよ。



今夏のサイトウ・キネン・フェスティバル松本の開催時期に合わせて、マーラー「交響曲第1番《巨人》」、モーツァルト「交響曲第32番」K318を収めたディスクが発売された（ユニバーサル・ミュージックより）

――「昔の色」とおっしゃいましたが、言葉で表現すると、どんな風になりますか。

O 言葉にするのは難しいけれどね、ボストン響はアメリカのオーケストラと、ヨーロッパのオーケストラの両方の長所をバランスよく持っているんですよ。他のオーケストラは、すごくアメリカっぽくなっちゃっているところもあるんだけれど、ボストンはアメリカ調に走らない。なんか、アメリカ的になりたくないっていうのがあるみたいよ。例えば、吹奏楽器や打楽器でも、大きな音はあまりよくない、とか。

ベルリン・フィルのお陰でたくさん勉強させてもらった

――そのように見ていくと、ヨーロッパのオーケストラの最高峰とされるウィーン・フィルやベルリン・フィルはどうでしょうか。

O ああ、それもまた全然違うな。ウィーン・フィルっていまだに、ウィーンで発展した楽器しか使わせない。クラリネットもオーボエも。フレンチ・ホルンも……、そう呼ぶといけないんだ。俺すぐ癖で言っちゃうんだけど、そうすると「俺、フレンチ・ホルンなんて吹いてないよ」って言われてね、それでみんな、ドーッと笑うの。ファゴットもあそこのだから、世界共通の楽器はフルートとトロンボーンくらいかな。トランペットもまあそんなところだけどね。だからアメリカ人とは全然違いますよ。

ベルリン・フィルはそういう楽器は一つもなくて、インターナショナルですね。バイエルン放送響もまったくそう。インターナショナルだから、昔よりもそういう意味ではずいぶん変わりましたよ。

――ムターさんが「この間マエストロ・オザワとベルリン・フィルで共演した時、カラヤンの音がしたから、ずっとカラヤンの音だと思っていたものは、実は音楽が本当に求めている音だったと気がついた」というようなことをおっしゃっていましたが、それはどういう音だったのでしょうか。

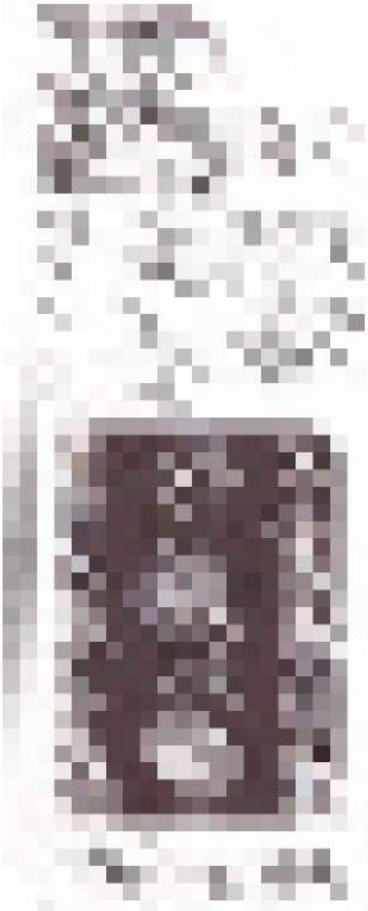
O それはちょっと解らないですね。雰囲気では解るけど、俺には上手く言葉で表現できないな。でも、その演奏会は確かにすごかった。オーケストラが本当によかった。ああいう風になればね、指揮者稼業は本当にやめられないですよ(笑)。完全に僕の意思を読みながら弾いてくれるから。同じ演奏旅行中に、チャイコフスキーの《悲愴》を、ザルツブルクではショスタコーヴィチの交響曲第10番に変えたの。これもすごかったね。これも、カラヤン先生の曲なんですよ。カラヤン先生、ショスタコーヴィチは10番しかやってないんじゃない？　今回はショスタコーヴィチの家族かなんかに請われて、僕は「貧乏くじひいたなあ」とか思いつつやったんですよ。でもすごく良かった、これも。「なるほど、こうやるのか！」っていうくらい、思った通りに反応してくれた。ああいうのってすごいよね。僕が思った通りを読むんですよね、どうやって読めるのか解らないけどね(笑)。

最近齋藤秀雄先生の指揮法教本（『指揮法教程』）が、フランス語や英語になって世界で有名になっていてね、よく「これはどういう意味なのか」って聞かれるようになったね。僕はそうやって指揮法を教えるメソードは持っていないけど、指揮者として音楽は伝えられているって実感できるね。

そう言えば、齋藤先生と一緒に、民音の指揮者コンクール（現在の東京国際音楽コンクール）の審査員をやらせてもらったこともあったなあ。（1970年、73年と2回、師弟共に審査員を務めた）当時は指揮のコンクールなんてあまりなくてね、受賞者にはその後活躍している人も多くて、よく記憶に残っていますよ。

僕自身はボストンで、オーケストラと一緒に育ったと思っているんだけど、ベルリン・フィルのお陰でたくさん勉強させてもらった。ウィーン・フィルもまあ、そういうところありますね。本当にもう、いろいろな曲をやらせてもらったからね、特にカラヤン先生と。全部僕と電話で話して、プログラム作ってたから。いいろいろやらされたのがよかったなあ、と思ってる。自分でやるんだったら怖くてやれないことでもね、先生に言われればやるじゃない？　本当に一番たくさんのレパートリーをあそこでやってるんですよ。一番長くやってるから。楽員さんも代々皆知ってるし、そこに若い人もどんどん入ってるから、すごい面白いですよ。だから毎年1、2回は戻るようにしてるんですけどね。今は段々仕事減らしてるけれど、日本の、サイトウ・キネンと音楽塾と、奥志賀はそのままやりたい。もっと増やそうなんてことも考えてるからね。音楽塾なんか、オペラとオーケストラと両方やろうと思って、もう始まってるの。再来年カーネギーに行く時には両方持っていくつもり。

――それでは今後、海外のオーケストラと契約するということは？

O ああ、もうないですね、もう。ゲストではウィーンも続けるし、パリ、スカラ座とか、たまにフィレンツェなんかは行くけどね。ゲストの方が気が楽ですよ。

――ありがとうございました。